

駅から ぶらり旅

文＝伊藤哲也
写真＝亀井川 英樹



取材時にはハロウィンのかぼちゃがディスプレイされていたニセコ駅。1988年に現在の山荘風に改装された。

寒 さが厳しくなるにつれ、温泉愛が強くなる。のんびりと湯めぐりなどするべく、ニセコ駅に到着した。この駅は一九〇四年（明治三十七）に開業し、今年百二十周年を迎えた。駅舎内にニセコリゾート観光協会の案内所が

あり、さっそく「ニセコ湯めぐりパス」（二二〇〇円）を購入。これは同協会の人気企画の一つで、日帰り入浴券として青シール二枚、赤シール一枚が付いており、最大三つの温泉に入ることができる。ニセコ町をはじめ周辺町村にある十五施設が参加している。



ニセコ湯めぐりパス。料金が800円以上の施設は青シール1枚、800円未満の施設は青または赤シール1枚で入浴できる。参加施設の詳細は公式HP参照。

●JRニセコ駅観光案内所（ニセコリゾート観光協会）／虻田郡ニセコ町字中央通142-1ニセコ駅舎内 ☎0136・44・2468。9:00～18:00、無休。4月下旬～10月末まではレンタサイクルの貸し出しもある（詳しくは公式HP参照）。



ニセコ駅

◎第二七回

ニセコ駅

まずは駅の向かいにある「ニセコ駅前温泉 綺羅乃湯」の暖簾をくぐった。洋風と和風の二種類の大浴場があり、男湯と女湯を毎日入れ替えている（男湯は奇数日が洋風）。和風は内風呂がヒノキ、露天が岩風呂になっている。露天は壁に囲まれているが、見上げれば青空が高い。中学生まで二百五十円で入れるという地元民ご愛用の

温泉である。

サウナ好きには聖地のひとつでもある。「ロウリュのアロマオイルは地元の会社がトドマツのエキスをベースに作っており、五種類を週替わりで提供しています」と、運営会社の木皿佳臣課長。室内にはラジオニセ



洋風の露天風呂。椅子が多く、サウナ後に涼むにも便利だ。泉質は単純温泉。源泉100%、加温、循環ろ過をしている。別料金（1時間1,200円）の小浴場もあり、家族風呂として使える（写真提供/綺羅乃湯）。



サウナ室は広くないが、それゆえにロウリュの蒸気が充満する。ロビーでは無料のWi-Fiが使える、パンとケーキの店「マイトリエ」もある（写真提供/綺羅乃湯）。●ニセコ駅前温泉 綺羅乃湯／虻田郡ニセコ町字中央通33 ☎0136・44・1100。10:00～21:30（最終受付21:00）、第2・第4水曜休（祝日の場合は営業し、翌日休）。※8～10月は無休、大人600円、小中学生250円。



(上)ロビーでもゆったりと過ごせる。冬は暖炉に火が入る。(右)広々としたリビングダイニング。窓の外には羊蹄山が見える。2寝室の客室は最大5人、3寝室の客室は最大7人まで宿泊できる。



(左) 亀卦川シェフ作「ザ・ニセコ・オードブル」。手前から時計回りにチーズ(オレンジはミモレット、白はゴーダ)、鹿肉のソーセージ(ビャブルスト)、パテ・ド・カンパーニュ、和牛のハツ。すべて地元メーカーのもの。(中央) 道産和牛と真狩村産ハーフボックで作った冷凍ハンバーグを、こんがり焼き上げた。(右) ビザショップ「マンドリアーノ」のマルゲリータ。レンジで温め、バジルの葉を新たに乗せた。

この放送が流れ、地元情報を聞きながら汗をかく。水風呂も屋外なので、冬はとりわけ身が引き締まる。

爽快な気分で、今夜の宿に車で向かった。途中、道の駅ビュープラザニセコで地元の野菜と肉製品、チーズなどを買い込み、さらにテイクアウトのピザも購入。準備は万全である。

「ニセコランドマークビュー」は暮らすようにステイできるコンドミニアム。すべて寝室が二つまたは三つのタイプで、必要な設備、備品はすべてそろっている。調味料も塩・胡椒はある。

全室羊蹄山ようていに向けており、高層階の居心地の良さは格別だ。夏には地下に自転車ラックも用意され、サイクリストにも好評という。マーケティングスタッフの渋谷純子しほやじゅんこさんが「十八年間連続で来る方、夏にひと月滞在される方など、常連が多くいらつしやいます」と言うのも、うなずける。

さて、今夜亀卦川カメラマンが作ったのは「ザ・ニセコ・オードブル」。メインのハンバーグには、既製品に赤ワインを入れてひと煮立ちさせたソースをかけ、スペシャル感を演出した。付け合わせの野菜はすべてニセコ産である。



幻想的な朝の羊蹄山。山裾に霧が流れていた。

暮れゆく羊蹄山を見ながら地元のクラフトビールで乾杯、そしてワインのコルクを抜いた。こんな風にパートナーと過ごせば、二人のきずなはもっと深まるに違いない。「ぼくたちもパートナーじゃないですか。仕事上ですけれど」と、ほろ酔い加減の亀卦川カメラマンが笑う。わかっているよ。シェフもやってくれるカメラマンは、世界に君ひとりだ。

翌 朝は「ニセコ湯本温泉 蘭越らんこし町交流促進センター雪秩父」へと、車を走らせた。この温泉の歴



大湯沼の光景。間歇泉が噴出して、第一次世界大戦時に硫黄を汲み上げたことで地下の構造が変わったのか、間歇泉は失われたという。

史は百三十年ほど前にさかのぼる。「明治十八年、岩内の渡島某がチセヌプリの南麓で間歇泉^{かんけつせん}を発見した。(中略)温泉は時間を定めて数回噴出し、そのまわりは湯沼(現在の大湯沼)になっていた」と、『新蘭越町史』にある。

現在、間歇泉はないが、源泉となつている大湯沼には周囲を半周できる散策路が整備されており、地底から湧き上がる灰色の熱湯が間近に見られる。取材時はちょうど

(右)雪秩父の露天(女湯)。泉質は単純硫黄温泉。源泉かけ流しで「湯量の調節で適温を維持している」(金子支配人)。(下)海外客に人気というロゴマーク入りのTシャツと湯桶、せっけん、手ぬぐい。せっけんは湯の花を練り込んでいる。



●ニセコ湯本温泉 蘭越町交流促進センター雪秩父／磯谷郡蘭越町字湯里680 ☎0136-58-2328。12:00～19:00 (最終受付18:30、4月～10月は10:00～)、大人700円、小学生300円、火曜休(祝日の場合は営業し、翌日休)。

ど木々が色づき始めており、大湯沼の湯煙と紅葉とのコントラストも素晴らしい。

雪秩父の露天風呂からも、青空と山々が望め、硫黄の香り漂う濁

り湯とダイナミックな開放感に浸れる。女湯の露天には「どろ湯」の浴槽もある。支配人^{かねこくにあき}の金子国昭さんによれば「泥パックをする女性で、いつもにぎわっています」とのこと。

締

めぐくりは「ニセコ温泉郷」にいた。滑らかな肌触りの湯は、メタケイ酸という成分を多く含み、美肌の湯である。サウナ室が広く、水風呂も備えている。喫茶スペースではビールやソフトドリンク、軽食も販売しているので、湯上がりに軽く一杯という愉しみもある。

濱田隆文^{はまだたかふみ}支配人は「昨冬にはテンが露天風呂に現れました」と教えてくれた。木々に囲まれた露天風呂は岩で囲み、透명한湯に緑が反映して美しい。湯舟でうつとりしていると、エゾリスが木の幹をかけ下りて行った。涼風が吹き、野鳥の声が聞こえる。何と優雅な気分だろう。

人に動物に景色に触れて、



(上)広々とした内風呂も窓が大きく、明るい。内風呂の湯は加温循環している。(左)いろはの露天は岩で組んでいる。湯は透き通るような透明であるが、木々の緑に鮮やかに染まり、目でも楽しめる。泉質はナトリウム-炭酸水素塩・硫酸塩・塩化物温泉。露天の湯は源泉かけ流しにしている。

ニセコの湯めぐりは心の底まで温まるものになった。

●ニセコ温泉郷 いこいの湯宿いろは／虻田郡ニセコ町ニセコ477 ☎0136-58-3111。12:30～21:00(最終受付20:00)、大人1,000円、小学生500円、11月24日～12月2日休(冬季は無休、夏季の休館日は公式HP参照)。宿泊は2名1室1泊2食付ひとり15,950円～。